

研 究 結 果 報 告 書

帝国の形而上学と植民地歴史哲学の可能性
－帝国日本の歴史哲学が朝鮮に及ぼした影響を中心に－

所属： 韓国外国語大学 教養課程委員会
役職： 非常勤講師
氏名： 李 慧真

この研究は植民地末期朝鮮の歴史哲学者である徐寅植、朴致祐、申南徹の思想的な論理過程を追求するうえで、彼らの理論的な基盤になった西田幾多郎の哲学と和辻哲郎の倫理学、そして京都学派の歴史哲学的根拠が、植民地朝鮮で実行された一つの様相を再検討したものである。特に、ここでは彼らが日本留学と京城帝国大学の学知を通じた現象学的な流れの場に置かれていたという事実と、マルキシズムの実践的追求という危うい岐路において植民地末期の新体制論へと移行した過程を、昭和10年代の日本の特殊な歴史的・思想的背景を中心とした「公共性」の問題から解明した。

すなわち、彼らのこうした思想的転回は、個人の選択の問題というよりは、「昭和10年代」という歴史的に特殊な契機が作動することによって、植民地朝鮮の情勢と日本の哲学が衝突していたということがより問題であった。それは日本の革新知識人と呼ばれた人たちの思想的な転向も、やはり彼ら、植民地末期朝鮮の歴史哲学者の思想的転回と時期的にほぼ一致していたということからも判断できる。したがって彼ら、植民地末期朝鮮の歴史哲学者の学知は、当時の日本の知識層の思想的な影響力の下にあったことを前提として、当代日本の歴史哲学的な流れと連動して考察した。

彼ら、植民地末期朝鮮の歴史哲学者は日本留学と当時の日本の思想の総本山といえる帝国大学を通じて日本の思想的影響下に置かれており、そのため彼らの用いる哲学的概念枠組みはすべて日本帝国のそれであったと言える。当代朝鮮の雑誌でもよく言及された「文化」、「教養」、「世界」、「危機」、「偶然」などの多少曖昧に見える用語の使用がそうであり、またマルクス主義者を自任していた彼らが「近代の超克」、「東亜協同体論」へと移行する経緯がそうである。それにもかかわらず、日本の全体主義をヨーロッパの古い全体主義と比較しながら弁証法的全体主義を要求した点、そして西田の「八紘一宇」を誤読することによって、個体の単独性を保障する中心なき（多中心の）世界を強調したという点で、それは帝国の権威を傷つけない範囲で、植民地民族についての再考を要請したものだと言える。

こうした点から、この研究では、植民体制の中での抵抗と協力には数多くの側面と観点が同時に存在するという視座を再確認できた。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題 名： 植民地・帝国のオントロジー―「植民地公共性」の朝鮮的形式

発表者名： 李慧真

会議名： 韓国自治学会・公共学会共同シンポジウム

日 時： 2013年 12月 10日

場 所： ソウル 漢陽大学

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

題 名： 植民地・帝国のオントロジー―「植民地公共性」の朝鮮的形式

発表者名： 李慧真

論文掲載誌： 韓国文学理論と批評

掲載時期等：2014年 2月 29日

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)